

Story B

「またいつか」私たちはあの時、そうお互いに約束をし別れを告げた。
あの日の別れからもう3年が過ぎていた…
そんな3年の月日が過ぎた今、私たちはお互いの道に進んでいた。

第一章

私たちは都内の高校に通う仲良し二人組千穂と鈴香。入学式の時に席が隣でそこから意気投合して話すようになった。

そんな私たちが仲良くなるきっかけになったのは一枚の写真でした。

千穂と鈴香は中学を卒業した春休み中、千穂は友達と鈴香は家族ととある写真展に行っておりそこで見た一枚の日常の写真が2人にとってとても印象的で心に残る写真であった。

その写真展で見た写真が忘れられず、私たちもこんな写真を撮ってみたいそんな話をしている間に2人は打ち解け仲良くなっていた。

だがしかし、2人はカメラすら触ったことのない素人だった為どうすることもできなかったのだ。そんな時、2人は部活紹介のパンフレットを読んでいた。そこに掲載されていた写真部のことを知り千穂と鈴香はこれだと感じ写真部に入部することを決めたのだった。

カメラをまともに触ったことがなかった2人だが写真部に入部してからは部活に行くのが楽しみで仕方がなかった。

鈴香「千穂ー！部活行こう！」

千穂「うん！ちょっとまって！今行くー！」

鈴香「はい！」

千穂「お待たせ！今日は何撮る？」

鈴香「どうしようねー！じゃあ日常的な写真撮ろう！」

千穂「いいね！じゃあ私、鈴香の日常撮る〜！」

鈴香「ありがと〜！私は千穂の日常撮るね！」

そんな会話をしながら放課後、部室に向かうのが二人の日課になっていた。

放課後、部室にて

千穂「鈴香こっち向いてー！」

鈴香「なにー？」

千穂はシャッターを切った。

千穂「やったー！鈴香の素の表情いただきました！笑」

鈴香「もー！遊んでないでちゃんとした所撮ってよー！笑」

千穂「ごめんてー、今度はちゃんと撮るからこっち向いて」

鈴香「はいはい！じゃあ千穂もこっち向いててね！」

鈴香「はい！」

私たちは互いを撮り合ったり校内を周って風景写真を撮ったりするのが部活の日課になっていた。

鈴香「今日も沢山いいの撮れたね！」

千穂「うん！鈴香のいいショットも撮れたし満足！」

鈴香「それはもういいから！笑」

千穂「えー！なんでよ～笑」

鈴香「ほら、もう下校時間だし帰るよー！」

千穂「はーい！笑」

その日の出来事や撮れた写真を見せあったりしながら好きな写真の話をしながら帰路に着いた。

とある日の放課後

千穂「ねね、一緒に写ろう！」

千穂はそう言って鈴香に駆け寄ってカメラを構えた。

鈴香「なによ急に笑」

千穂「いいからいいから」

千穂「はいチーズ！」

千穂はシャッターを切った。

鈴香「急にどうしたの？」

千穂「そういえば、お互いのことは撮ってるのに2人写ってる写真一枚もないなって思って！」

鈴香「確かにそうだね」

千穂「だから今のうちに写真に残したくて！」

千穂は照れながら言った。

2人笑顔で写ってるこの写真は大切に部室に飾ることにした。

この日の写真は2人にとっても大切な思い出となった。

そんな何気ない日常が楽しくてずっと続けばいいなんて思っていた。

でもその楽しかった日常も長くは続かなかった…

2年になりクラスも別々になってしまった2人、気づけば鈴香は写真にどんどのめり込んでいった。

一方、千穂は鈴香ほどそこまで写真に情熱を持ってないでいた。

鈴香「今日はなに撮ろうかなー？ね、千穂？」

千穂「あ、うん、そうだね」

鈴香「最近、どうしたの？部室に来る頻度減ったし、なんかあった？」

千穂「別にそんなことないよ」

鈴香「そっかー」

鈴香は千穂の事を心配しつつも写真を撮り続けた。千穂はそんな鈴香を見てどんどん自信をなくしてしまう。

千穂「鈴香はすごいな」

鈴香「ん？なんか言った？」

千穂「ううん、なんでもない」

鈴香「ねね、これよくない？今までで一番いいかも！」

千穂「うん、そうだね」

鈴香と千穂の間に徐々に溝ができ始めていった瞬間だった。

鈴香はそのことに気づかないで写真に夢中になっていた。

2年の冬のこと

鈴香はとある写真を目にしてその写真に衝撃を受けていたのだった。

それは今までにないほどに美しい風景が広がっている写真だった、鈴香はその写真を見て私もこんな風景写真を撮りたいと思ったと同時にある夢が生まれていた。

千穂はちよくちよく部室に行き写真は撮るものの情熱は持てないままなんとなく過ごしていたのだった。

そんなある日鈴香の夢を耳にする。

千穂「そっか、鈴香夢ができたんだ…。それなのに私何してるんだろう。」

鈴香「あ、千穂！見つけた！部室に一緒に行こう！」

千穂「ごめん、今日ちょっと用事あるから」

千穂はそう言ってそそくさと行ってしまった。

鈴香「どうしたんだろう、？」

鈴香は心配で仕方なかった。

千穂「こんなじゃ鈴香と対等になんて話せないよ。」

千穂は鈴香みたく夢を抱いていない事や写真に情熱を持っていない自分を鈴香と比較してしまい引け目をずっと感じていたのだった。

次の日から千穂は部室に来なくなった。

千穂が部室に来なくなり2人は高校3年に進級していた。

2人はそれぞれの学校生活を過ごしていた。

鈴香は写真を沢山撮り続けて、千穂は同じクラスの子と遊ぶ毎日だった。

鈴香「今日も来ないか、写真撮りに行こうかな。」

そんな事思いながらも鈴香は写真を撮り続けた。

友達a「千穂、今日は部活行かなくていいのー？」

千穂「あ、うん！行かなくて大丈夫ー！それよりも遊ぼうー！」

千穂は部室に行かず残り少ない学校生活を楽しもうと友達と遊んでいた。

そうして2人はすれ違い、時間が過ぎてってしまった。

鈴香「よし！今日もいいのが撮れた！千穂、これどうかな？」

いつもの癖で千穂に話しかけていた、だがその千穂はいない。鈴香はふと我に返った。

鈴香「あ、そうだ。千穂きてなかったんだ。」

鈴香「千穂、なんで来なくなっちゃったのかな？」

鈴香はそう思いながらそのまま帰路に着いた。

友達a「千穂、今日どこ行くー？」

千穂「んー、どうしよっか？プリとかカラオケはどう？」

友達a「お！いいね～！」

千穂「じゃあ、カラオケいこ！」

友達a「おっけ～、あ、そういえば部活一緒の鈴香って子ずっと写真撮り続けてるみたいだよ」

千穂「そうなんだ」

友達a「あんたは行かなくていいの？」

千穂「うん、別に強制ってわけじゃないから！もう部活の話はなし！それよりも早く行こう！」

千穂は友達aの言葉を遮ってカラオケに向かった。友達も最初は心配していたが徐々に心配をしなくなった。

それからというもの、鈴香は夢の風景写真家になるべく沢山撮り続け日々精進していた。千穂は相変わらず友達と遊ぶ毎日だった。
そんな2人も高校三年生、卒業が近づき次の進路をどうするか決めなければいけなかった。鈴香はとりあえず、卒業後はフリーで写真を撮っていくつもりで先生にもそう伝えていた。千穂は何も考えておらずとりあえず就職する予定だ。
そうして2人の卒業後の進路は決まったのだった。ようやく進路も決まり、残りは卒業するのみ。だけど、2人の間には溝ができたままだった。
千穂が部室に来なくなってから2人は一言も話さず、すれ違ったままとうとう卒業の日を迎えてしまうことになる。

第二章

鈴香は千穂の事を気にしつつも写真制作に対する情熱は留まることはなく、2人はすれ違ったまま卒業を迎えてしまった。

卒業式当日

鈴香「もう高校も卒業か。このままでよかったのかな」

鈴香はそんな事を思いながら学校へ向かっていた。それもそのはず、まだ千穂とすれ違ったまま何も話せていないのだ。

そうこうしている間に学校に着いた。

友達b「もう卒業だね～」

鈴香「そうだね、なんかあっという間の3年間だったよね。」

友達b「うんうん、鈴香ともこうして話すのも少なくなっちゃうね。」

鈴香「うん。そうだね。私と一緒にじゃなくても元気でやるんだよ笑」

友達b「はいはい笑そういえば、千穂とはあれから話したの？」

鈴香「ううん、話せてない。」

友達b「そっか。卒業する前に話せるといいね。」

鈴香「うん。」

鈴香は千穂との関係を知る友達といろいろ話しそのまま卒業式が行われる体育館に向かった。

千穂「もうこの学校ともさよならか～。いろいろあったけど楽しくて濃い3年間だったな。」

千穂も学校に向かいながら高校生活を振り返っていた。

千穂は登校途中に友達に会い一緒に登校した。

友達a「千穂ー！おはよう！」

千穂「おはよー！」

友達a「卒業式らしいいい天気だね！」

千穂「そうだね！」

友達a「こうやって千穂と話したりするの減っちゃうの悲しいな」

千穂「私もだよ～、仲良くしてくれてありがとうね」

友達a「こちらこそだよ、就職しても頑張ってるね！」

千穂「うん、ありがとう！たまには遊ぼうね！」

友達a「もちろんもちろん！」

思い出を振り返りながら友達と話していたらあっという間に学校に着いた。

千穂「このクラスで過ごすのも最後か、悲しいようで悲しくないんだか不思議な感じだな」

3年間の思い出がふと蘇ってきた。その中には鈴香との思い出もあった。

千穂「あんなに話して写真を一緒に撮ってた鈴香とももう口をきいてないのか。このままでいいのかな。」

千穂も鈴香と同じ考えではいた。だけど互いに素直になれず今日にまでなってしまった。

千穂「まあでも今更だよね。」

そんなふうにか穂は感じていた。

そしてそのままクラスを後にし卒業式が行われる体育館に向かった。

卒業式終了後

高校生から見たら長い長い卒業式がようやく終わった。

生徒たちは教室に戻って先生と話したり、寄せ書きを描きあったり、最後の談笑をしたり各々の時間を過ごしていた。

もちろん、千穂も鈴香も同様だった。

千穂は友達と最後のトークを満喫していた。

友達a「あの千穂が就職ね～笑私はてっきり大学行ってカメラでもやるのかと思ってたよ。」

千穂「何よそれ笑別に行きたい大学がなかったんだからいいでしょ！」

友達a「まあいいけど笑社会人になっても考えすぎないようにしなよ！あんたはすぐマイナスに考えがいくんだから」

千穂「わかってるよ」

友達a「わかってるなら写真部のことちゃんとケリつけてから卒業しなよ」

千穂「え？」

友達a「鈴香ちゃんだけ？あの子は少なくともあんたが思ってるほど遠ざけてなかったよ」

千穂「どういうこと？」

友達a「鈴香ちゃんはずっと千穂の事心配してたから。」

千穂「そんな訳ない、だってずっとカメラに集中して、、」

友達a「それは千穂が思い込み過ぎてただけ、鈴香ちゃん、周りの人にいろいろ相談してたみたいだよ。」

千穂「そうだったんだ、知らなかった。」

友達a「だから、ちゃんと話せるときにちゃんと話しておきなよ。」

千穂は友達に言われ急いで部室に向かった。

千穂「卒業する前にちゃんと話さなきゃ！やっぱりこのままじゃダメだ」

そう感覚的に感じたのだった。

最後の部室にて

部室には鈴香以外の部員が寄せ書きを書いていた。

部室のドアを開ける。

写真部部員「あれ、千穂？やっと顔出したな！」

千穂「え？」

写真部部員「私たち千穂が戻ってくるのずっと待ってたんだよ！それなのに卒業式まで部室に来ないとはね！笑」

千穂「そうだったんだ、急に出なくなってごめん。」

写真部部員「まあ、でも最後の最後に部室にきてくれてまた話せてよかったよ！」

千穂「うん、あ、そういえば鈴香は？」

写真部部員「鈴香はまだきてないよ、先生と話すとか言って後から行くとは言ってたけど」

千穂「そっか、」

写真部部員「うん、せっかくだし千穂も寄せ書き書いていきなよ！」

千穂「あ、うん」

そう1人の写真部員は言って千穂に寄せ書きを書き残すように促した。

だがしかし、千穂は何を書いていいかわからなかった。

それもそのはずだ、一年近く部室にいてなかったのだから。それでも千穂は何か書き残しておきたかった。

いろいろ考えてるうちにみんな帰ってしまう。

写真部部員「それじゃ、私たちもう帰るね！鈴香に会ったらよろしく言っておいてね！」

千穂「うん、わかった。今ままで部室に来てなかったけど最後に話せて待っていてくれてありがとうね。またどこかで！」

写真部部員「うん！またどこかでね！」

千穂は部員のみennaと最後の挨拶を済ませた。そしてまた寄せ書きに何を書くか考え始めた。

千穂「どうしたらいいのかな」

何を書くか必死に考えた。

このまま何も書かずに鈴香を待つという手もあったが千穂は今更面と向かって話せそうにないと感じた。

そう思っていた時、ある会話を思い出した。

「またどこかで」

さっき部員のみennaと話していた会話を思い出していた。

千穂「これなら伝わるかな」

千穂は鈴香に向けて黒板に寄せ書きを書き始めた。鈴香が見てくれると信じて。

千穂「これでいいかな、最後まで鈴香に謝れなかったけど、この寄せ書きを見て私の気持ちが伝われば、、」

千穂はそう思いながら寄せ書きを残し誰もいない部室を後にした。

一方、鈴香はお世話になった先生と談笑していた。

鈴香「先生、3年間お世話になりました！」

先生「おう、卒業おめでとう！3年間部活に勉強よく頑張ったな」

鈴香「ありがとうございます」

先生「結局、写真家になる夢は変わらなかったか」

鈴香「はい、この先どんな険しい道になるかわからないですけど、自分の力を試したくて。」

先生「そうか、そこまで考えているなら私はその夢応援するよ」

鈴香「ありがとうございます。何かあったらまた相談させてください」

先生「もちろん、いつでも連絡しておいで」

鈴香「はい！」

先生「こんなにも成長してたんだな」

鈴香「先生、何かいいました？」

先生「いや、なんでもない。ほら私だけじゃなくて他の友達とも最後の別れの挨拶してきなさい」

鈴香「はい！それじゃ先生元気で！」

先生「おう！お前も元気でな！」

そう言って鈴香は先生と別れ部室に向かった。

鈴香「みんなまだいるかな？」

急いで部室に向かった。

部室に行く道中写真部部員のみんなに会った。

写真部部員「あれ、鈴香？」

鈴香「あ、みんな！」

写真部部員「やっと先生との話終わったの？笑」

鈴香「うん！」

写真部部員「来るの遅いから先に寄せ書き書きいちゃったよー。」

鈴香「そうだったのね、ごめんね」

写真部部員「私たちの方こそごめんね、これからみんな用事あるからもう行くけどちゃんと寄せ書き読んでね」

鈴香「うん！もちろん！写真部として一緒に活動してくれてありがとうね！」

写真部部員「うん、こっちこそ写真の楽しさを教えてくれてありがとう！また時間がある時撮りに行こうね！」

鈴香「もちろん！それじゃまたね！」

写真部部員「うん！また！」

写真部のみんなと別れた鈴香はそのまま部室に向かった。

ようやく部室に到着した。鈴香は無人の部室に入りみんながかいた寄せ書きを読んでいった。

鈴香「みんないろいろ書いてくれてるな～笑」

寄せ書きを読んでいくとその中に千穂からの「またいつか」という言葉が書かれていることに気づく。

鈴香「え、千穂？まさか部室にきてたの？」

鈴香はそんな事を考えながら部室を見渡し一年の時に撮って部室に飾ってた2人の写真を見つける。

鈴香「この写真ここにあったんだ。ずっと忘れてたけど私たちの思い出はしっかり残ってたんだね。」

鈴香は寄せ書きと2人が写った写真を見てそう思ったのだった。

鈴香「私もそろそろ行かないと」

千穂と鈴香2人の道は違ってしまったけど、2人の思い出はしっかり残っていることに安心して、鈴香もまた前を向き部室を去っていった。

第三章

2人は高校を卒業し互いの道に進んでいた。

鈴香は風景写真家になるべく、卒業後も写真制作を続けていた。そして、千穂は就職をし、何となくカメラは鞆に入れているものの、写真を撮る事はなくなっていた。

鈴香は高校卒業後は写真制作を続け沢山の写真コンテストに写真を送っていた。

鈴香「昨日はこっちに写真を送ったから今日はこのコンテストに応募してみよう。」

そんな感じで各種コンテストに撮った写真を送っては結果を待っての繰り返しの日々を送っていた。

鈴香「とりあえず、今出せる最高の写真は送ってる、どこかに引っかかればいいな。」

そんな風に思いながらコンテストの結果を待っていた。
だがしかし、どのコンテストの結果も落選ばかりだった。
鈴香はその落選を受け入れまた挑戦をし続けた。
だが、その挑戦も虚しく叶うことはなかった。
鈴香「今回もダメだったか...本当にこのままやっていいのかな」
鈴香は写真に対してはじめて自信を無くし落ち込んでしまった。
一方、千穂は卒業後就職し仕事に励んでいた。
千穂「おはようございます。」
課長「おはよう、今日までに終わらせたい作成物あるから千穂さんは今日はこれやっておい
て！」
千穂「わかりました！」
課長「ありがとう、終わったらまた教えてくれ」
千穂は普通の会社に行きごく普通のサラリーマンの日常を送っていた。
千穂「ふー、とりあえずお昼休憩にしよう。」
同僚「千穂一、終わった？ランチ食べに行かない？」
千穂「とりあえず、途中まで終わったかなって感じ。いいよ、いこう！」
千穂は同僚とランチに向かった。
同僚「最近、課長にこき使われ過ぎじゃない？」
千穂「そう？」
同僚「そうだよ！たまには断ることも大事だって」
千穂「んー、そうか。まあ頭に入れておくよ」
同僚「うん。」
課長にこき使われてる話をしながらランチは終わった。
千穂「さあ、お昼も終わったし残りも頑張ろう！」
同僚「そうだね～」
ランチが終わった後、会社に戻り課長に頼まれた作成物の続きを作りはじめた。

落選続きの鈴香はまだ立ち直れずにいた。それでも写真を撮り続けたがどれも納得いくものには
ならなかった。

鈴香「こんなじゃダメだ...もっと絶景じゃないと...」
次第にそんなことを思うようになった。鈴香は絶景を撮るために新たな絶景を見つけては足を運
び写真を撮るようにした。だが未だに納得のいくものは撮れていなかった。

鈴香「よし、明日はここにいこうかな」
鈴香はいろいろ調べ次にいく絶景スポットを見つけ、撮影の準備を始めた。すると母がやってき
た。

母「また、どこかいくのかい？」

鈴香「うん、絶景写真家になるには休んでなんてられないよ」

母「行くのはいいけど、最近あなた無理しすぎよ」

母は鈴香がスランプになっている事も落ち込んでいる事も知っていた。だからこそ休まず活動して
る鈴香が心配だった。

鈴香「別に大丈夫だよ、こんなところで立ち止まっていられないから。」

母「そう？ならいいんだけど無理し過ぎないでね。なんかあったら言いなさいよ」

鈴香「うん、ありがとう」

鈴香は母と少し話撮影の準備を再開し母はその場を後にした。

鈴香「次いくところは車で行けるとはいえちょっとした秘境の地ではあるからな、いろいろ持っ
ていこう。」

そう考えた鈴香は、撮影に使うであろう機材を多めに揃え車に積んでいった。

鈴香「よし！これで明日の準備は大丈夫かな！明日こそ納得のいく写真を撮るんだ。」

明日の意気込みも十分なまま鈴香は身支度を済ませ早めに眠りについた。

そして次の日、天気は生憎の雨だった。

千穂は同僚とのランチを済ませた後、会社に戻り作成物の続きを始めていた。

千穂「んー今日中に終わるかな...？」

そんな心配もしつつ終わらせられるように努めた。

課長「千穂さん、頼んだ資料どんな感じ？」

千穂「そうですね、半分は終わってるんですけど、残りがまだ時間かかりそうって感じですね」

課長「そうか、了解したよ」

千穂「今日中に終わらせられるようにするのでお待ちいただければと！」

課長「うん、ありがとう！助かるよ！」

課長にそう伝え、千穂は急ぎ目で作業を再開した。

「お疲れ様です」どこからともなく聞こえてきた。もう17時を回っていたのだった。他の社員は
みんな定時上がりをして残ったのは私と課長だけだった。

千穂「みんな帰っちゃったか...」

課長「千穂さん、いつも残業させてごめんね」

千穂「いえ、する事もないので大丈夫ですよ、後少しで終わるのでお待ちください」

課長「うん、ありがとう」

課長とそんな話しをした作業の続きを行った。気づけば時間は20時を回っていた。

千穂「もうこんな時間か...でももうこれを書くだけだ」

20時が過ぎようやく終わった。

千穂「ふー、終わった。課長終わりました」

課長「うん、ありがとう！あとはこっちでやっておくからもう帰って大丈夫だよ」

千穂「わかりました、ありがとうございます。お先に失礼します」

千穂はそう言って会社をお後にした。もう辺たりは暗くお店もやってなかったのでコンビニに
寄って夜ご飯を買うことに。

千穂はたまたま高校の近くのコンビニに行っており、コンビニを出てそのことに気付いた。

千穂「なんか懐かしいなって思ったら学校の近くのコンビニだったか。あの頃はいろいろあった
し濃い時間だったな。」

千穂はそんな事を思い、思い出に浸りながら学校の前を歩いて家に帰宅した。

鈴香は目を覚まし外を見た。外は生憎の雨だった。

鈴香「雨か...でも行くしかないんだ。このままじゃ...」

鈴香は着替えを済ませ、届いていた自分宛の手紙を持ち車に乗り込み車を走らせた。

鈴香「今日はずっと雨っぽいな...」

長い長い時間をかけ車を走らせようやく目的地に到着した。

鈴香「やっと着いた。」

到着し車を後にし周りを散策し始めた。散策しカメラを向けるもやはり辺りはどん曇で雨も降っている絶景というにはほど遠い景色だった。

鈴香「やっぱり天気が良くないとダメだったのかな。せっかくここまできたのに。」

今までの落選続きで精神的に疲弊した状態だった鈴香はどこからともなく涙が出て止まらなくなっていた。

鈴香「もう私には無理なのかな…」

そんな事を思いながら傘もささず雨に濡れていた。

車に戻った鈴香は届いていたコンテストの手紙を開いた。その結果も落選だった。

鈴香「もう嫌だ…辞めてしまいたい。」

想いが強すぎて再び落ち込んでしまった。

落選通知を車のグローブボックスにしまおうとして開けた。そこには沢山の落選通知が溜まっていたのだった。

しまおうとした時、高校の時に千穂と撮った2ショットの写真を見つけた。

鈴香「こんなところにあっただ。」

鈴香は写真を見て楽しかった高校の頃を思い出していた。

鈴香「あの頃は楽しかったな…写真を撮ることが楽しくて夢中になっていたっけ…そう言えば楽しかったのも全部千穂のおかげだったな。」

そんな事を思いながら、写真に夢中だったあの頃の気持ちを思い出し自分の写真の原手にかえていた。

鈴香「今の自分は入賞することだけを考えて写真を楽しむ事をずっと忘れてた気がする。」

鈴香「やっぱり千穂はすごいよ、また助けられちゃったな。ありがとう」

自分の写真の原点だった「写真を楽しむ心」を思い出した鈴香はまた前を向いて進む気力を奮い立たせるのだった。

原点にかえりまた写真への気力を取り戻した鈴香は風景写真家になる気持ちと写真を楽しむ心を持って今までで一番過酷な挑戦をしようとしていた。

それは山を登っての絶景写真だった。

鈴香「今の私ならなんでも出来るはずだ。」

そう鈴香は確信していた。だからこそ挑戦しようと思ったのだった。

そして登山当日、しっかり登山着きて対策をしカメラを持ち登山を開始した。

確かにキツイものではあったが今までのことに比べたらこの辛さは小さいことだった。

そしてようやく山頂につき鈴香はファインダーを覗き込んだ。

鈴香「そうだ、私が求めていた絶景はこれだった。」

そうして撮れた絶景写真が鈴香の代表作となった。

千穂は相変わらず仕事に忙しい毎日を送っていた。

千穂「今日は営業周りか忙しくなりそうだな」

朝起きてそんな事を考えながら仕事に行く支度を済ませ家を出た。

会社に着き、営業周りの資料をもらい確認しながら思った。

千穂「あ、今日の営業周りはこれだけなんだ。」

朝考えてたより忙しくなくほっとしながらもその足で営業周りに向かった。

お昼が過ぎ、千穂は一旦お昼休憩を挟んだ。

千穂「ふー、とりあえず休憩〜。」

休憩しながらお昼以降の営業周りの時間を確認していた。

千穂「この感じだと16時くらいには終わるかな？」

いろいろ考えながら次の営業の資料を見ていた。お昼休憩も終わり千穂はまた営業周りを再開した。

千穂「よし！残りの営業も頑張るぞ！」

頑張りのかいあって予定通り16時に営業周りが会社に報告を入れた。

千穂「お疲れ様です、本日の営業周り終わりました。」

課長「お疲れ様です、了解です。ありがとう！千穂さん、いつも残ってもらってるから今日はもう直で帰って大丈夫だよ！」

千穂「あ、わかりました。ありがとうございます」

千穂は課長にそう言われ、お言葉に甘えて今日は帰ることにした。帰る途中たまたま学校の近くを通り、なんとなく写真部の部室に立ち寄った。

千穂「なんか、なんとなく入ってきちゃったけど大丈夫かな？」

その部室には風景写真家として有名になった鈴香の作品と高校時代の2人の2ショットが飾ってあるのを見つけた。

千穂「あ、懐かしい！そう言えばこの頃は写真を撮ってるだけで楽しかったな。にしても鈴香こんなに有名になったんだね。やっぱり鈴香はすごいや！」

千穂は昔懐かしの記憶を思い出しながら部室を回り写真部に入った頃のただ写真を撮るだけで楽しかった心を思い出していた。

千穂「さて、そろそろ帰りますか。」

学校を出た後千穂は目の前のなんでもない風景に対して自然にカメラを構えていた。

高校卒業後2人は会うことはなかったけれどそれぞれの人生を歩みしっかり写真で繋がっていた。そして一枚の写真と「またいつか」その言葉が大人になった2人をつなぎ合わせてくれていたのでした。